

日本人のカミ信仰について*

植松忠博**

はしがき

本稿は、日本人に固有のカミ（神）信仰を中心に、農民、商人、職人がどのようなカミ信仰をもってきたのか、ということ明らかにしようとするものである。

どのような民族でも、古代にはそれぞれ固有のカミ信仰をもっており、われわれ日本人もその例に洩れなかった。問題は、日本ではそうした「民族宗教」であるカミ信仰が、仏教や儒教という世界宗教の浸透ののちに至っても消滅することなく、現在まで継承されてきたことであり、しかも江戸時代後期から数えても200年におよぶ日本経済の発展に対して、カミ信仰が明らかにプラスの作用をしてきたのではないかと考えられることである。ヨーロッパでは、キリスト教の浸透によって民族宗教は少なくとも人々の意識の表面からは消滅してしまい、それゆえに資本主義が発展したかのように見えるのに対して、日本ではそうではない、ということに興味注がれるのである。

よく知られているように、日本の民族宗教は多様であり、世界にも稀なほど複雑である。それゆえ、これまでも宗教学、民俗学、社会学それぞれの立場から多くの研究がなされてきた。しかし、残念ながら経済学の視点からこの問題を扱った論文は、これまで——宮本又次氏のようなごく少数の例外を除いて——書かれてこなかったのであり、いわばそこに大きな研究の空白が存在するのである。本稿がめざすものは、その空白に一步を踏み入れることである。

* 本稿の作成に際しては、京、阪、神の各業界の企業の方々と、少彦名神社、土佐稲荷神社、伏見稲荷大社、松尾大社（50音順）の方々から聞き取りをすることができた。聞き取りに応じて下さった皆様に、最初に厚くお礼を申し上げたい。また、有益な助言を与えて下さった宇野正人氏と、伏見稲荷大社の資料を寄贈して下さいた彌宜の生浪島恒彦さんにも、厚くお礼を申し上げたい。

** 神戸大学大学院国際協力研究科教授

本稿の叙述を次の手順ですすめよう。最初に第I節で、日本人のカミ信仰の原型とその展開を、柳田国男の氏神論にしたがって整理する。ここでは村の氏神の変容が村人の心理に与えた経済的な影響に注目したい。次の第II節では、近世江戸時代における商人と職人に焦点をあてて、それらの人々の信仰を検討する。ついでながら、江戸の武家屋敷に神社が祀られていたことも明らかにしたい。つづいて第III節では、商人や職人の末裔である現在の企業について、企業の神社と業界の神社信仰について考え、あわせて筆者の調査の結果を提出したい。最後の第IV節で、本稿の要約と簡単な結論を述べることにしよう。

I カミ信仰の原型とその変容

1. 一門氏神から村氏神と屋敷神へ

わが国のもっとも古い神話のひとつである『古事記』によれば、日本人にとっての最初の神はアメノミナカヌシノカミ（天之御中主神）、タカミムスビノカミ（高御産巢日神）、カミムスビノカミ（神産巢日神）、ウマシアシカビヒコヂノカミ（宇摩志阿志訶備比古遲神）、アメノトコタチノカミ（天之常立神）の5神（別天神五柱、いずれも独神）であった。そしてもう一つの『日本書紀』によれば、最初の神はクニノトコタチノミコト（国常立尊）、クニノサツチノミコト（国狭槌尊）、トヨクムヌノミコト（豊斟淳尊）の3神（乾道独化）であった、とされている。

古来、日本の神道史は、主にこの『古事記』と『日本書紀』（記紀）の記述を基本として

日本人のカミ信仰を体系づけてきた。そして、後の『延喜式』巻9、10の「神名」のなかで、神社の格付けがなされてからは、神社の格に大きな関心が払われてきた。

しかし、もともと記紀は7世紀の後半に朝廷の手で編纂されたものであり、古代の一般庶民がどのような信仰をもっていたかについては、深い関心が払われていない。おそらく多くの日本人はそれ以前から、もっと素朴なカミ信仰をもっていたであろうと推測される。そして、そうした人々の民俗的な信仰は、その後も朝廷を中心とした公的な神社信仰と微妙に交叉しながら、現在に及んでいるといえよう。

これについてわが国民俗学の祖、柳田国男は、「縦の歴史を横倒しにして見る」という彼独自の手法、つまり歴史の発展には地域差があるから、現在の民俗事情をくまなく収集して比較検討することによって、過去から最近までの変化を跡づけることができるという手法によって、日本人のカミ信仰を次のように分析している。ただし、多くの先覚者と同様に、柳田の言葉づかいは慎重で、文章は明快でない。したがって、以下の要約は筆者の理解であることをお断りしておきたい¹。

柳田によれば、日本人のカミ信仰の原型は、同じ血族の者が集まって、彼らの祖先を祭り、その好意を感謝するとともに、日々の生活を見守ってくれることを期待するものであった

1 以下は、柳田国男『氏神と氏子』（1947年）のなかの「氏神と氏子」「敬神と祈願」「祭と司祭者」の要約である。

という。これがそれぞれの氏（血族）が祭る神、つまり「氏神」である。氏神のなかには遠い祖先だけでなく、最近みまかった祖父母、両親や親族も含まれていたから、人々は氏神に対してじゅうぶんな親近感を感じていたことであろう。

こうした氏神信仰は日常のことであったが、とくに二月、四月の耕作前と九月、十一月の収穫後には、豊作の祈願と感謝をこめて、大きな祭りがおこなわれた。人々は祭りに先だつて物忌みをし、祭りになるとそのつど祭壇を設け、氏神に神饌を供えるとともに、氏人（氏子）も一緒に食事に参加することによって、氏神との一体感を実感し、安らぎをおぼえたのであろう。

柳田はこうしたカミ信仰の原型を「一門氏神」とよび、それが後に「村氏神」へと変容するとともに、あわせて「屋敷氏神（屋敷神）」を生み出したという。ここで「村氏神」というのは、同じ村に住む複数の一族によって共同で祭られる氏神のことであるが、氏神が一族の氏神から村のそれへと昇格するには、いくつかの理由があった。

その1つは各一族の祭りの時期が春、秋の、しかも近接した日であったこと、2つはいまだ常設の神社がない状態では、そのつど協力して共同の祭場を設営しやすかったこと、3つは大勢の村人が一緒に祭りを催すことによって、祭りの感動が昂まり、村人相互の社交や協力が促進されたこと、4つは産業の発達や教理の複雑化などにもなって、専業の神職が生まれるようになったこと、そして最後に、

仏教が浸透して各家ごとに「みたま棚」を設けるようになり、あるいは他の神社からカミを勧請するようになると、個々の一族の氏神を祭るよりも村人共通の氏神を祀る方が、むしろ実感にあうようになってきたこと、これである²。

その結果、村の氏神はそれぞれの一族の祖先から村人共通のカミに変容し、臨時のではなく常設の神社が設置され、一族の長による代行ではなく専業の神職がおかれるようになる、というように新しい展開がおこり、それと並行して、村氏神だけでは満足しない人々のなかに、それぞれの屋敷地、あるいは付属地に「屋敷神」を祀る人が現れるようになったのである。屋敷神については、その後に直江広治の大著『屋敷神の研究』が発表され、上記の柳田説を実証する試みがなされている。直江氏の研究で興味深いことは、村社のほかに屋敷神をもっている家が、自宅の屋敷神を「氏神」とよんでいる場合には、村氏神を「ウブスナ様」とか「鎮守様」などとよんで、両者をはっきり区別していることである³。一家・一族のカミと地域のカミとを識別しているのである。

2. 祖先神から勧請神へ

このように、村のなかの個々の一族がそれぞれの一門氏神を祀るという状態から、村人が一緒になって一つの村氏神を祀るようにな

2 柳田国男「氏神と氏子」『柳田国男全集14』538-541 ページ。

3 直江広治『屋敷神の研究』80 ページ。

ると、それにともなって二つの変化が発生した。その一つは祀られる神が、それぞれの一族の祖先神から、いっそう効験あらたかな勧請神に移っていったという変化であり、もう一つはカミに対する村人の態度が、「敬神」から「祈願」を主たるものに変わっていったということである。もちろんこうした変化は、ある時期に全国的いっせいに起こったというものではなく、一部の村から他の村へ、それぞれの村のなかでも反対者の意見を抑えながら、徐々に進行していったのだが、それにもかかわらず、長い眼でみればそうした変化はやはり確実に進んだのである。

柳田国男は、村人がよその地域のカミを勧請するようになった原因として、二つを挙げている。一つは、氏神（祖先神）の力では氏人の期待に応えられない事態が、時折発生したことである。例えば広範囲に及ぶ干魘、イナゴの害、疫病などが発生すると、もともとそのような災害、害敵を調伏する力をもっていただけではない祖先神では、手に負えなくなる。ところが、村の外からは「何々地方の何々神社の神様は疫病退治の力がある」、などという情報が伝わってくる。そうなれば、そうしたカミを村の社にお迎えして祀ろうという気になるのは、自然の発意であったであろう。

二つは、勧請神を迎えるさまざまなルートが開拓されたことである。柳田はそれについて、ほぼ時代の古い方から順に、①神仏習合の例として寺院がその寺内にカミを勧請したケース、②任地に赴任した国司が、管内の神

社を巡拝するかわりに、その地の主要なカミを国府の所在地にまとめて勧請して祀ったケース、③新たな領地を取得した領主が、そこにカミを勧請して自家の神社を築いたケース、④靈験あらたかなカミの信者が中心になって、そのカミを勧請したケース、⑤神職、修験、巫女などの行者が勧請したケース、の5つを挙げている⁴。

問題はその場合に、旧来から祀られていた氏神と新たな勧請神との関係をどう調整するのかということであるが、柳田は、氏神と氏人が一緒になって新たなカミを勧請したのであって、旧来の氏神が新たな勧請神のために排除されてしまうようなことはなかった、といている。彼の言葉を使えば、「表面には出なくても、氏神によその神を勧請するというのは、元の氏神の思し召または許諾という以上に、神が氏人と心を合せて、新たに第二第三の神を、招待せらるるという考え方で[あって]、元の祭神の交代または引隠を意味したものでなかったように私には見える」⁵ということである。

これは重要な指摘であると思う。なぜならこの説によれば、たとえ村の社の祭神が稲荷神や八幡神であっても、なおかつ村人の祖先もまたその社と一緒に祀られつづけている、と考えられるからである。一家の屋敷神をもたない村人の場合には、村の鎮守様は依然として祖先神の居所でありつづけるのである。

4 前掲『柳田国男全集14』、546-561 ページ。

5 同上書、554 ページ。[] 内は植松の挿入、以下の注でも同じ。

3. 敬神から祈願へ

それにもかかわらず、村の社の主たる祭神が村人の祖先から靈験あたらかな勧請神に交代するようになると、カミに対する人々の態度は、昔ながらの敬神からカミへの祈願へと変化していった。

もともと村人は、氏神にむかって「まず年々の作物の稔り」を祈り、さらに「一族一郷の繁栄と安楽と、おおよ想像し得る限りの害敵の駆逐」を祈ってきた。それらは、いわば土地の誰もが必要とする「公共の治安」（柳田の言葉）であり、人々は祭の場をつうじて、彼らの祖先にそうした願いを告げ、そしてまた願いの達せられたことを感謝してきたのである⁶。それは、村人によるカミへの敬神の表現であった、といえよう。

しかし、神社の主たる祭神が勧請神になり、その靈験のあらたかであることが個々の村人によって認識されてくると、人々はカミにむかってわが田畑の作物の豊作を、わが家の家内安全と家人の健康を、わが商売の成功を、それぞれ個別に祈願するようになる。さらに、稲荷神が商売繁盛に御利益があり、住吉神が海上安全に御利益があり、天神が学問の神様であることがわかると、人々はお稲荷様には商売繁盛を、住吉様には海上安全を、天神様には学問の成就を、それぞれ祈願するということになる。あるいはもっと進んで、商売繁盛をお願いするために稲荷神社に参詣し、学問成就のために天満宮とか天神様に参詣する、

というようになる。こうして、カミに接する人々の態度が、敬神から祈願に変わっていったのである。

柳田国男は、「氏神と氏子」（もともとは、1946年の講演）のなかで、いま神社と名のつくものは全国に約11万社存在するが、そのうち官国幣社はわずかに200余社、府県社は約1400社、郷社は2600余社に過ぎず、他は、村社が約4万5000社と、以上のどの社格をも有しない無格社が6万社弱もあり、これら村社の半分、無格社の4分の1は「氏神」神社と呼べるものであること、しかも大半の国民はほとんど村から外へ出たこともなく、村社ないし無格社のカミを祈りつづけてきたのだということを、強調している⁷。それらの村人にとって、村の神社のカミとは、まず彼らの祖先を意味したに違いない。これが日本の農民のカミ信仰である。

「我々のここにまず問題としなければならぬのは、他の十万社以上のもの、すなわち郷社以下の地方地方の神社が、これからどうなっていくのだろうかということである⁸、と考えていた時の柳田の視線は、なによりもそのような村人と村氏神に注がれていたことに、注意をしておきたい。

しかし、こうした柳田の思いにもかかわらず、時代が下るにつれて、現実の神社に祀られている祭神が、村人たちの祖先神から稲荷や八幡のような固有名詞をもった勧請神に置き換えられていったことは、間違いはない。そ

6 同上書、592ページ。

7 同上書、512 - 533ページ。

8 同上『柳田国男全集14』、512-513ページ。

して、われわれが考察しようとしている他の一群の人々、すなわち商人、職人たちは、主に都市で経済活動をおこなっていたのであるから、彼らの信仰していたカミは、靈験あらたかな福神や守護神であることが多かったのである。

II 商人の信仰、職人の信仰、武家の屋敷神

1. 商人の信仰

われわれの関心は現在につづく経済活動であるので、さしあたって近世江戸時代にまで遡って、商人と職人の信仰について調べることにしよう。

最初に商人の信仰をとりあげたいと思うが、これには二つの側面がある。一つは商人集団として示された信仰であり、他の一つは商家の家訓に現れた信仰心の表白である。

1) 株仲間の信仰

近世の商人の信仰については、なによりも宮本又次氏の研究が参照されるべきである。これまで、宮本氏ほど深い関心をもって商人の信仰を研究した研究者は現れていないからである。

商人集団の信仰についても、最初に宮本氏の『株仲間の研究』のなかの一節に注目したい。周知のように「株仲間」とは、江戸時代中期以降に、問屋、小売などの活動をおこなう商人が、お上の公認をえて結成した同業者組織であり、株仲間の名義で同業者の数を制限して営業の独占を図るとともに、同業者間の情報の交換と協力を密接にして業界の発展

を図り、あわせてお上から課された冥加金の引受けと、業者のあいだへの負担の配分などもおこなっていた。したがって、株仲間は当時の商人集団の実態をよく表しているのである。

ところで、宮本氏はこの著書のなかで「株仲間の宗教的精神」という項を立てて、大阪を中心とした株仲間の信仰について、次のように述べている⁹。

まず、いっぽんに株仲間には宗教的な色彩が強く、それぞれの業種の守護神を持っている場合が多かった。

大阪の例でいえば、①道修町の薬種仲間は神農を信仰し、②瀬戸物町の陶器問屋は地藏尊を信仰し、③堂島の米仲間と、④天満の青物市場の仲間は天満の天神を信仰し、⑤鞆の肥物問屋は住吉神社を信仰し、⑥真鍮吹き業者は庚申信仰をもっており、⑦挽物職人の仲間は水上祖神を信仰していた。そして彼らは、それぞれ信仰する神社の祭礼には、種々の催しを行ったり、参加したりした。

大阪以外でも、⑧灘の酒造仲間は松尾神社を信仰し、⑨大山崎の油商人は中世以来、石清水八幡宮を信仰し、⑩京都の本屋は京都の北野天神、八坂神社、愛宕神社を信仰し、⑪大津の船大工仲間は正月、5月、9月に貴船講を開いて、貴船神社に鳥目を奉納することを慣例としていた。また、⑫大工、屋根師、石工など、建築に関する職人は11月8日の韃祭に稲荷を祭り、⑬石見の紙漉は石州和紙

9 宮本又次「株仲間の研究」『宮本又次著作集1』100-101ページ。

の祖神として、柿本人麿を祭っていた。

このほか、⑭大阪の薩州小間物問屋は毎年、伊勢・住吉・高野山の3カ所に金200匁ずつを奉納するとともに、正月、5月、9月の参会ごとに客船安全の祈願をこめて、住吉神社に神楽料12匁を奉納し、年行司がこれに参詣し、⑮三所の綿市問屋の仲間は、毎年正月、5月、9月に、住吉神社に庭御神楽を奉献した。さらに、⑯京都本屋仲間、江戸本屋仲間、大阪本屋仲間の「三組本屋仲間」は、住吉神社に文庫を建て、仲間が出版した書籍をこの文庫に奉納した。

ここには合計16種類の商人、職人の株仲間が、それぞれの守護神を祀って信仰し、あるいは参詣し、あるいは幣帛や神楽を奉納していたことが述べられている。当時の商人の信仰が厚かったことがうかがえる。

以上の指摘を裏付ける具体例を、一、二、挙げることにしよう。

1つは、大坂道修町の薬種問屋が、神農とスクナヒコナノミコト（少彦名命）を祀っていたことである。大坂『塩魚干し魚商旧記、外各商』に収められた「薬種商之記」によれば、

「それ天地開けてより、以て天人あまくたり（天降り）まし、人を養ふに五穀を以てし、疫病を療するに草木算実の功用を味ひ分てもつてす。是れ異朝にては神農氏、本朝にては神祖少彦名神也。いわんや四海靜謐にして五常三道盛んに行はれ、四民其の職守りて豊かに、克つ是れ災害をさけ、憂ひとする事なく、とはいへとも、唯だ止む事なきは風寒暑湿のた

めに傷らるゝの疾病のみ。故に欽明天皇乃御宇に百済国より医博士貢して医術を伝ひ、採草をなすといへり。また推古天皇菟田野に薬獵なさしめ給ひし事など、日本紀に見へたり」とある¹⁰。疫病を退治されるカミは、外国では神農さま、わが国では少彦名命であるからこれを祀らなければならない、というわけである。この神農と少彦名命については、次のⅢ節で述べよう。

2つめに、大阪の商人の住吉神社に対する信仰の例を幾つかあげよう。

綿買次積問屋仲間は文化4年の「仲間定法」のなかに、「毎年積留、正月、十月、船之海上渡海安全の為、住吉御礼社参、早朝より不参これ無き様、打ち揃い相勤むべき事」¹¹という一条を入れている。毎年正月と十月には海上輸送の安全を祈願して住吉大社に参詣するので、欠席しないようにしよう、という申し合わせである。

木綿商仲間は、嘉永5年の「追規定申合之事」のなかに、「七組年行司中参会、例年春秋両度、内老度は住吉社参、仲間安全のため御神楽致すべき事」¹²という一条を入れている。大坂の七組の年行司は毎年春秋二回総会を開いているが、そのうち一回は住吉大社に参詣して御神楽を奉納する、という申し合わせである。ここで「七組」というのは、地区別に組織された油町組、東堀組、堺筋組、北

10 大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済史料集成』（第6巻）、560ページ。

11 前掲、『大阪経済史料集成』（第6巻）、418ページ。ただし、原文を読み下し文に改めた。

12 同上第6巻、471ページ、同上、634ページ。

組、上町組、江戸組、天満組の七組であり、この七組が仲間を作っていたのである。

安政5年の材木商の書付けによれば、当時大問屋のあいだで住吉講が作られていた。これは、材木仲買商のなかに問屋に対して代金不払いがあった場合に、その節季中に請求すれば仲間の仲買商から支払いを受けることができる、という制度である。こうしたリスク保険に対して住吉講の名が冠せられているのは、明らかに住吉大社との関連を示すものである¹³。

干鯛商の仲間は、文久年間に住吉大社に石灯籠を奉納することを計画した際、その主旨について、「文久三年の頃よりの企てにて、住吉神社へ諸方漁事売買の客衆、廻船安全並びに仲間商法繁栄を祈らんか為め、石灯籠一対奉納致したく、それ是の趣意を以て諸客へ相ひ頼み候事、御神慮のほど恐縮奉り候えども、同仲間徳益の法便御神慮を仰ぎ奉り・・」と述べている。商品の航海安全と商売の繁盛を願っての奉納なのである。これに対して、仁名寺屋喜兵衛以下130名が賛成し、調印をしている。ただし、この時の灯籠奉納は資金不足のために実現せず、明治23年にたって、ようやく落成したようである¹⁴。

ここで起こる第一の疑問は、彼らがなぜこれほどまでに信仰心に厚かったのか、ということである。先の宮本氏は、その理由について「信仰する一対象物を仲間結合の目標にしようとする意図」であったとして、次のよう

な分析をしている。

もともと商売の本質は営利の獲得にあるのだから、商人を自由に競争させると、各自が自己の利益をめざして乱立し、秩序がなり立たなくなってしまう危険がある。そこで「これを一括し、協同を保ち、一体的に結合させるためには、神仏福神というような、経済原則を超越した扇眼を持ち来たさなければ纏まりがつかなかったであろう。ここに株仲間結合の枢軸としての宗教的精神の不可欠であった理由が潜む」¹⁵のではないかと、しかも、神仏福神に対する商人の「共同の畏怖と信仰とは仲間関係に調和と安泰とを齎らし・・神愛にもとづく仲間愛があるゆえに、各成員の仲間全体に向かっての方向づけは、なんらの強制もなき、自発的なものになったと考えられる」¹⁶というわけである。

ここには、経済史家らしい鋭い考察がみられる。宮本氏は、規制的な同業者集団である株仲間が、商人各個人がめざす営利活動と仲間（業界）がめざす秩序とを両立させるものをもつ必要に迫られて、仲間の誰もが納得し、しかも仲間愛を高めるものとしての神仏信仰が作られた、とみているのである。しかも、神仏への信仰は世俗の商業活動を超越するものであるが故に、商人たちの精神を清らかにし、同時に仲間の競争をも和らげるという、二重の役割を果たした、ということになるであろう。

もう一つの疑問は、なぜこれほどまでに住

13 同上第6巻、538ページ、652ページ。

14 同上第5巻、214 - 215ページ。

15 前掲、『宮本又次著作集1』103ページ。

16 同上書、103ページ。

吉大社に対する商人の信仰が厚かったのか、ということである。

これは住吉大社の性格と、江戸時代の大坂の役割とに起因している。住吉大社の主祭神はソコツツノヲノミコト（底筒男命）、ナカツツノヲノミコト（中筒男命）、ウワツツノヲノミコト（上筒男命）の三神であり、これに第4神として神功皇后が祀られている。

最初の三神は『古事記』、『日本書紀』において、イザナギが亡妻恋しさに黄泉の国にイザナミに会いに行き、その変わり果てた姿に驚いてしまい、彼女に追われながらようやく逃れて、筑紫の日向の小戸（おど）の橋の櫛原（あはぎはら）で禊、祓をした時に海中から生まれた9人のカミのうちの3人であり、『書紀』には、「其の底筒男命、中筒男命、上筒男命は、是れ即ち住吉大神なり」¹⁷と書かれている神である。

ところがこの三神は、後に神功皇后が新羅征討から帰って、船団を率いて難波に向かった際に、荒波で船が進まず、占いをした時に現れて、「吾が和魂（にぎたま）をば宜しく大津渚中倉長峽（おおつのぬなくらのながを）に居くべし。便ち因りて往来ふ船を看むと。是に於て教えの随（まにま）に鎮坐さしむ。則ち平に海を度（わた）ることを得たまふ」¹⁸とあるように、荒波を鎮めて神功皇后の難波上陸を助けたとされているのである。

この大津渚中倉長峽が現在の住吉大社のある場所（大阪市住吉区）であり、約束にした

がって住吉大社にこの三人の神と、後から参加した神功皇后とが祀られているのである。

この神社は、奈良時代から海上交通の守り神としての信仰が高かったらしく、『万葉集』（巻19）には、「天平五年、入唐使に贈れる歌一首并に短歌」として「虚（そら）みつ大和の国、あをによし平城（なら）の京師（みやこ）ゆ、押照る難波に下り、住吉（すみのえ）の三津に船乗り、直乗（ただわた）り、日の入る国に遣〔は〕さる、吾背の君を懸けまくの、ゆゆしかしこき住吉のわが大御神、船の舳（へ）に領（うしは）きいまし、船艫（ふなども）に御立ちいまして、さし寄らむ・・」¹⁹とある。これは、遣唐使の一行が、まず航海の安全を住吉神社に祈願して、そのあと住之江の津から船出していたようである。

このようにして、住吉大社は海上交通の安全を見守って下さる神様（もちろん、この神様の御利益はそれだけではないが）ということになって人々の信仰を集めた。ところが江戸時代になると、周知のとおり、大坂は天下の台所といわれるほど、全国の商品流通の中心になった。とくに中期以降、江戸・大坂間に菱垣廻船、樽廻船の定期船が就航し、また日本海岸から大坂に至る西廻り航路が発達すると、海上輸送はいっそう活発になり、それにとまって商人の住吉信仰は高まったのである。

いま住吉大社を訪れる参拝者の眼をひくものは、「永代常夜燈」とか「献燈」と書かれ

17 『神典』189 ページ。

18 同上、『神典』368 - 369 ページ。

19 岩波文庫『新訂新訓万葉集』285 - 286 ページ。

た、大小600を超える石燈籠である。全国の神社にこれほど多くの、これほど大きな石燈籠が林立している神社はないであろう。その大半が、先にみた商人たちの奉納品であると思う。近くまで行って、その幾つかの石燈籠の表面の文字を読み取ってみよう。

- 永代常夜燈、奥州會津・羽州米澤荷主中、享保12丁未歳9月吉日。
- 永代常夜燈、住吉大神宮、糸荷廻船中、享保21丙辰歳正月吉日。
- 永代常夜燈、願主南部・松前商客中、大坂近江屋仁右衛門、延享2年乙丑正月吉日
- 永代常夜燈、摂州二茶屋浦、神戸浦廻船中、寛延3庚午年11月吉日。
- 永代常夜燈、堂島、寛政5年癸丑9月吉辰。
- 永代常夜燈、大坂油町、北国積木綿屋中、寛政11年己未11月吉辰。
- 常夜燈、江戸大坂住吉講、江戸日本橋釘店・大門通鐵店・本船町鐵店、大坂鐵諸問屋中・鐵積問屋中・釘鐵積問屋中、享和3年癸寅6月吉日。
- 常夜燈、さこは、文化9年壬申4月□日。
- 永代常夜燈、大坂藍屋中、文化15年戊寅2月吉日。
- 献燈、諸国紅花荷主中・京都紅花屋中、天保7年丙申3月。
- 永代常夜燈、伏見方三拾石船持中、嘉永5年壬午正月吉日。
- 永代常夜燈、伏見方三拾石船頭中、嘉永5年壬午正月吉日（一対）。

○永代常夜燈、和州吉野郡材木商人中、安政5年戊午6月吉日。

○常夜燈、濃州紙出屋仲間、慶応4戊辰年4月。

○常夜燈、さかい魚仲間、明治3年庚午9月。

これは境内を歩きながら、筆者が読み取ったわずかに少数の例に過ぎない。こうした石燈籠が、おびただしく並んでいる。現存している燈籠の多くが江戸時代後期のものであることから推測すると、古い燈籠で整理されたものもたくさんあるだろう。そうなると、奉納された燈籠の総数は千をはるかに上回るのであろう。なんと多くの地域の、多くの業種の商人が住吉大社を信仰していたことであろうか。

2) 家訓にあらわれた信仰

商家には家訓があった。これはもともと武家の家訓を模倣したものであるが、江戸時代には商業の発達につれて、重要なものとなった。この家訓のなかに、商人の信仰が表されている場合がある。なぜなら、家訓は商家の存続を目的として制定されたものであり、したがって、家業の始祖、あるいは中興の祖の偉業を讃え、その努力を引き継いで家業を発展させることが強調されるからである。それらの一、二をみてみよう。

最初は鴻池家の家訓である。鴻池家は尼子家の家臣、山中鹿之介の二男新六（幸元）が商人に転身して、摂津の鴻池村で酒造業を起こして成功したことから出発したが、新六は

酒の江戸送りで好評を博すると、大阪に出て酒造と販売をはじめた。二代正成（鴻池善右衛門之宗）は海運業、両替商をも兼業して成功し、さらに三代善右衛門宗利の代になると、両替商に専念して発展し、ここに揺るぎない基礎を築いた。

このうち、初代幸元が定めたとされる「幸元子孫制詞条目」（23条）では、第1条が「万端正路を専とし、王法国法を守り、仁義五常の道に背かず、主君大切、父母に孝行、家内睦じく、譲り奢らず、第一家職を勤むべき事」となっており、第2条は「神明棚持仏壇毎朝払ひきよめ、精誠祈念仕るべし・・」、第3条は「先祖恒例の仏事怠慢なく、急度（きつと）勤行仕るべし・・」²⁰となっている。社会倫理と神仏崇拜、先祖遺徳の遵守から家訓が始まっているのである。

また三代宗利が遺したものに、正徳6年の「先祖の規範並家務」がある。これは5カ条の定、8カ条の定（行事）、21カ条の条から構成されているが、最初の「定」をみると、短い前文につづいて、第1条には「御先祖より譲り請け候家督、首尾よく相続仕らず候ては、御先祖への不孝又は子孫繁盛致さず候ゆえ、常々善右衛門身持ちの儀、何角書付けを以って申し渡し置き候」、したがって、素行の正しくない者は一族相談のうえ追放する、と書かれている。つづいて、第2条では親類縁者に対しては金銀の融通をしないこと、第

3条では鴻池家家督を護るため、その8、9割は本家相続人に譲ること、第4条では先祖が住んだ久宝寺町の屋敷を大切に扱い、年忌、法事をこの屋敷でおこなうこと、を指示している。そして最後の第5条では従業員に対して、「惣手代中へ神文申し付け候。神文の表、弥（いよいよ）以って相守り申さるべく候事。並びに右神文写し取り、前書き相加え、これある巻物毎年9月2日に相定め、手代中打ち寄り披見致され、相守り申さるべく候・・」²¹とある。ここで「神文」とは、一同で連署して神仏に実行を誓う形式をとった文書であり、鴻池家の場合にも、奉公人が連署していたのであろう。この「定」でも、先祖の遺徳を継承することが強調されているのである。

家訓に神仏の崇拜が書き込まれているのは、鴻池家に限らない。吉田豊氏の編集された『商家の家訓』によると、²²

名古屋の伊藤呉服店（後の松坂屋）の第11代次郎左衛門が遺した『伊藤呉服店家訓録』（明和5年）には、「毎日暫時成りとも、神仏に礼拝致すべく候。人々思ひ寄りの仏菩薩の名号一遍なりとも唱え有るべく候・・」とあり、

近江日野の山中家の二代兵右衛門が遺した「慎」（享和2年）には、「仏事等大切に相勤むべき事」とあり、

名古屋の呉服商、水口屋の「水口屋店方掟

20 以下は、宮本又次「鴻池家の家訓と店則」、宮本編『大阪の研究』（第3巻）、55-59ページ。ただし、原文を読み下し文に直し、送り仮名をつけている。以下、同じ。

21 同上書、59-61ページと、吉田豊編訳『商家の家訓』129-136ページによる。

22 以下の家訓は、吉田豊編訳『商家の家訓』による。伊藤家の家訓は172ページ、山中家は184ページ、水口家は194ページ。

書」(文化7年)では、「各毎朝早く起き、神棚江拜礼いたし、仏前並びに先祖の霊拝いたし、早速銘々役場江出勤致すべき事」とある。いずれも、神仏に対する崇拜を求めたものである。

ここで気が付かれることは、商人仲間がカミ信仰を中心に結束していたのに対して、商家の家訓では仏事の励行を強調しているものが多いことである。もちろん、ほとんどの商家には稲荷大明神などの屋敷神が祀られていたのだが、家訓にはカミ信仰は強調されていない。これはなぜかと推測するに、家訓の作成者としてはとにかく後代の者に、先祖の築いた家業を継承して欲しかった、少なくとも世俗でいわれるような「親苦勞する、子楽する、孫乞食する」というようになって欲しくなかったのである。そうすると、どうしても先祖を実感できる仏事や仏壇がもっとも重要になる。ここに家業としての日本の商家経営という特徴が現れている、と考えることができよう。

2. 職人の信仰

一方、職人の信仰については、遠藤元男氏の大作『日本職人史の研究』がある。その遠藤氏は、職人たちがもっていた、いわゆる「職人氣質」の根底を、「親に仕え、祖先に仕え、神に仕える精神と行為とにある。これこそが、近世的産業精神である。家業としての意識である。この家業に対する真摯・誠実・謙虚・敬虔こそが、技術に対する意欲ともなり、形而に対する情熱ともなる」と捉えてい

る²³。

つまり、職人は自分の携わっている職業を、先祖代々継承してきた、したがってまた後代に継承していくべき家業として考えていた。その結果、まずいちばん身近な先祖である親方に誠実かつ謙虚に仕えることによって、仕事の極意を修得しようとし、ひとたび修得した技術はこれを忘れず、修練によっていっその磨きをかけ、さらには弟子に伝授していくことを職人の終生の任務とした。この道が「職道」といわれるものである。

職人が親に仕え、先祖に仕えながら仕事の極意を修得しようとする気持ちは、しぜんに彼らをして、先祖の先祖である「職道としての祖神」に仕えようとする気持ちに発展していく。それが職人にとっての守護神である。したがって、守護神はしぜん職種によって異なることになる。

遠藤氏によれば、「大工・屋根師などの建築部門の職人は聖徳太子を祀る。2月22日の太子講がこれである。・鍛冶・鋳物・鋸(かざり)などの金属部門の職人は、11月8日に稲荷神を祭った。鞆(ふいごう)祭である。・轆轤(ろくろ)・挽物などの木工部門の職人は4月7日に水上祖神を祭った。また石見国の紙漉は祖神として柿本人麿を祭った²⁴ということである。

ここで、職人の信仰の一、二を紹介しよう。

1つは、建築職人である。建築職人が聖徳

23 遠藤元男「職人氣質の基底」、遠藤『近世職人の世界』156ページ。

24 前掲、『近世職人の世界』159 - 160ページ。

太子を祀って「太子講」をもっていたことは有名である。その根拠は明かではないが、おそらく聖徳太子が生前、四天王寺や法隆寺など、すぐれた寺院を建立されたという故事にもとづいているのであろう。宝暦年間に立石定準の著した『匠家必用記』のなかに次のような一文がある。

「聖徳太子を・・実に祖神と敬ひ奉るは、天地開闢するとひとしく始めて、此の道を起し給ふ。故に祖神と申し奉る。総じて、祖神の祖といふ文字は事の始めといふ意有り。此の外、鋳物師の祖神・鍛冶の祖神・医の祖神等も日本にてそのことを始め給ふ。故に祖の一字を置きてあがめ奉る也。まづ、そのごとく、番匠の祖神も其の道を興し給ひて、御子孫に伝へ給ひ、また人より人に伝へて、今此の職をつとむるは、これ職神の遺教也。今より前へくり戻して祖神の教なることを明らむべし。・・また祖神たるによって、忌日を祭り、仏経をよみ、魚類を禁じ、精進すること、聖徳太子を祭らばさも有るべし。番匠の祖神を祭るといへば神事也」²⁵、と。

第2に、金属職人は霜月8日に鞆(ふいごう)祭をおこなっていた。これについて、黒川道祐は宝暦年間の書『日次記事』のなかで、その由来をこう紹介している。

「11月初8日 神事 稲荷社火焼、神御供社家松本氏調進。相伝。[むかし] 鍛工三条小鍛冶宗近が刀剣を鋳せし時、稲荷神が出現し、而して鉄槌を搗(う)ち、以って鍊力を

鍛ふるを助くと云爾。宗近鍊刀の石盤は、いま東山知恩院山門下に在り。銀匠、鍛工等、およそ鞆を設ける者は悉くこれを祭る。或(あるひと)鞆祭と謂ふ。知恩寺の鎮守は元賀茂明神なり。三十九世満靈和尚、稲荷八幡を加ふ。故に今日稲荷明神の火焼あり」²⁶、と。

つまり、稲荷神が小鍛冶の三条宗近の刀剣の製作を助けたという故事にちなんで、この日に鞆祭を開催するのである。

この祭は、次第に金属職人全体に広がっていった。江戸時代の末には、「霜月8日 稲荷大明神御火焼 吹革(ふいごう)祭といふ。鍛冶仏具師箔匠、其の外一切金具細工の諸民、生産(うぶすな)は申すに及ばず、此の神を信仰の輩は、今日ことさら祭り祝うなり」²⁷、といわれる状況であったという。

3. 武家の屋敷神

江戸時代には職人や商人だけでなく、武士も信仰心が厚かった。彼らは仏教でいえば浄土宗(これは徳川家の菩提寺が浄土宗の大本山、芝の増上寺であったことに影響されている)や禅宗(これは鎌倉、室町時代以来の伝統である)の信者であり、あわせて神社の信仰心をもっていた。それだけでなく、武家屋敷内に屋敷神を祀っていた。

武家屋敷のなかの神社については、まとまって書かれた史料はないようだが、現代の企業

26 黒川道祐「日次記事」『日本庶民生活史料集成』、23巻、116ページ。ただし[]内は植松の挿入。

27 速水春暁『大日本年中行事大全』(天保3年)、『日本庶民生活史料集成』第23巻、316ページ。

25 前掲、『近世職人の世界』159ページより引用。

の神社にもつじの興味ある事実なので、幾つかの事例を挙げよう。

まず斎藤月岑の『東都歳時記』から、江戸時代後期の江戸の武家の屋敷神の例をとりあげよう²⁸。

1. 赤坂溜池の台にある、松平和州公（川越藩主松平大和守）の藩邸には、国元松山から勧請した箭弓（やきゅう）稲荷神社が祀られており、毎月一日には町人の参詣が許されていた。

2. 三味線堀にある、武蔵忍藩（藩主は松平下総守）の中屋敷には一目連社があったが、この神社は頭痛直しの御利益があるとの評判で、毎月一日には願掛けの人々で賑わったという。

3. 江戸町奉行大岡越前守忠相で有名な大岡家の赤坂の下屋敷では、国元尾張の豊川稲荷を勧請して豊川稲荷を祀っており、稲荷祭の時には一般の参詣を許した。豊川稲荷の祭神はダキニ天であるが、町奉行の役職のためか、盗難よけに効験があるといわれたという。

4. 浅草新堀にある立花家の下屋敷内には太郎稲荷が祀られていたが、この神社は文化年間にすごい人気になり、「立花家の下屋敷の鎮守太郎稲荷の流行神は近古聞くも及ばぬ群参にて、その頃新堀の人道絶ゆることなく、門内より本社まで十町余りの左右奉納の幟に

て垣をなし、神前は賽銭供物に山を築き、信仰も他に越るものから、盲目は杖を離れてはじめて白日を拝し、足萎え思はずも高きに登る」というありさまであったという。

5. 文化元年に赤羽の有馬藩の下屋敷に祀られた水天宮は、次第に流行になり、「祭神は詳ならず」にもかかわらず、「近き頃よりはやらせ給ふて、朝より夕まで信男信女陸續して絶[え]ず。諸人神符を請ふて守となす。此神は専ら水難を守らせたまふが故、都下に靈験を得るもの多し」という人気であった。

水天宮は、もともと寿永4年の源平壇ノ浦の合戦の後、高倉平中宮（建礼門院）に仕えていた官女按察使局（あぜちのつぼね）伊勢が千歳川（現在の筑後川）の辺に逃れて、安徳天皇を祀って創建したものとされている。それが後には、こうして水難、安産の守神として、江戸で人気を博したのである。

6. 虎御門を出たところにある、丸亀藩（藩主は京極家）の上屋敷には国元の金比羅宮が勧請されて祀られていた。この神社は「虎御門外京極家御藩屋敷、[毎月10日には] 謁詞（さんけい）の貴賤陰晴をきはらず、未明より輻輳して靈験を仰ぐ、近鄙よりもまうづる人多し。植木其[の]外、諸商人市をなせり」というありさまであった。

金比羅神は、もともとインドの薬師12神将の一人である宮毘羅大将または金比羅童子のことであり、後には鰐神あるいは海神とされた。しかるに、この神は海難よけの海神として日本に伝えられ、古い時代に、現在の香川県琴平町の山麓に本社が建てられた。江戸

28 以下の記述は、斎藤月岑著、朝倉治彦校注の『東都歳時記I』、とくに朝倉氏の詳細な注によっている。松平藩は21ページ、一目連社は20、22ページ、豊川稲荷は44-45ページ、有馬藩は57、60ページ、丸亀藩は72-74ページ。

なお、水天宮については『神社辞典』180ページの「水天宮」を、金比羅の由来については、同書144ページの「金比羅」を参照した。

に勧請されたのは、この神社であろう。

武家の屋敷神としての金比羅宮はほかにもあり、下谷の生駒家藩邸、小石川御門内の高松家藩邸、小石川見附の松平家上屋敷、白金の高松家屋敷、麻布六本木の京極家下屋敷、麴町二丁目の京極家、木挽町三丁目の京極備後守屋敷などにも、それぞれ金比羅神社が祀られていたという。

以上は、江戸の事情であるが、江戸以外の土地でも武家屋敷に神社が祀られていた。ここでは有名な2つの例を挙げよう。

1つは山川菊栄の『武家の女性』の一節である。彼女は、幕末に水戸藩の中級武士で、藩校弘道館の教師を勤め、『大日本史』の編纂にたずさわっていた、母方の祖父青山延寿の家の屋敷神について、こう書いている。

(この家は)「神道の家でしたから、神棚には伊勢の大神宮様と鹿島様のお札が祭ってあり、また庭にはお稲荷様があります。お稲荷様といっても祭ってあるのは狐ではなく、菅公様でした。菅公様は学問の神様で、武の神としての鹿島様に対する文の神として祭られており、1月15日には、これらの神々様にお神酒を供えました」²⁹。

このように稲荷神社に天神様をお祀りするということも珍しいが、それは恐らく、屋敷を借り受けた青山延寿が教育者であったために、前の持ち主の屋敷神のご神体を入れ換えたものと推測される。実は青山延寿は四男であったために、実家を継ぐことができず、自分の

住まいを持つまでに相当苦労しているのである。

もう1つは福沢諭吉の『福翁自伝』である。彼は少年時代に中津の叔父中村術平の養子であったが、その当時の中村家とその隣家の屋敷神について、こう書いている。

「年寄などの話にする神罰冥罰なんと云ふことは大嘘だと独り自から信じ切って、今度は一つ稲荷様を見て遣らうと云ふ野心を起して、私の養子になって居た叔父様の家の稲荷の社の中には何が這入て居るか知らぬと明けて見たら、石が這入て居るから、其石を打擲って仕舞て代りの石を拾ふて入れて置き、又、隣家の下村と云ふ屋敷の稲荷様を明けて見れば、神体は何か木の札で、之も取て棄て、仕舞ひ、平気な顔して居ると、間もなく初午になって幟を立てたり太鼓を叩いたり、御神酒を上げてワイワイして居るから、私は可笑しい」³⁰。

ここには、生涯無宗教者だったと伝えられる諭吉の少年時代の宗教観がよく示されている³¹。しかし、それと同時に、中津藩でも武家に屋敷神が祀られていたことが窺えるのである。

ところで、このように多くの大名、旗本、武士が、それぞれの屋敷に神社を祀っていた理由は何であろうか。一つは、大名や旗本が国元の神社を江戸の屋敷のなかに勧請して、国元での信仰を継承しようとした、ということがある。大岡家の場合などがそれである。

30 福沢諭吉『福翁自伝』岩波文庫、23ページ。福沢諭吉選集第12巻、22ページ。

31 千種義人『福沢諭吉の社会思想』27-45ページ。

29 山川菊栄『武家の女性』、岩波文庫、14-15ページ。

しかし、稲荷神社の場合はそうではあるまい。おそらく、藩主も家臣も、稲荷大明神の御利益にあやかりたいと思い、町人で溢れている街なかの神社に行くくらいなら、いっそ屋敷のなかに神社を勧請して祈願しようということではなかったろうか。

面白いのは、そういう武家の屋敷神の御利益が江戸市中で評判になり、町人が武家の屋敷に押し寄せたこと、それにこたえて武家が屋敷を開放して、町人の参詣を許し、市がたつほどの賑わいをみせたことである。こんなふうに武士と町人が交流していたのかと思うと、なんとも愉快である。

Ⅲ 企業の神社

これまで、近世江戸時代の商人、職人の信仰をとりあげて、彼らが熱心な神仏信仰者であったことをみてきた。おそらく、内には平和に安定して、それぞれの地域が独立を保ちながら、外には閉ざされていた江戸時代こそ、日本人がもっともにぎやかに神仏に対する信仰を抱いていた時代であったのだろう。「村人の大半は村から出なかった」という柳田国男の推測とは異なって、江戸時代後期になるとずいぶん多くの村人が京都見物、江戸見物に出かけている。その名目は伊勢神宮、川崎大師などの神社、仏閣への参詣であった。

しかし、幕末に国学が盛んになると、神社は異常なまでに持ち上げられ、その挙げ句に、明治政府によって、神社は庶民の手から引き離されて、国家の手で囲い込まれ、政治の手段となり、ついには侵略戦争へと国民を駆り

立てる道具とされてしまった。「国家神道」が、これである。その結果、柳田国男が非難したように、カミ信仰にもっとも理解の乏しい国家官僚によって、庶民の心の支えであった神社そのものが整理統合され、一部は壊されてしまう事態まで発生した。このことは、神社にとっても日本人にとっても、もっとも悲しむべきことであった。

しかし、第二次大戦後、こうした国家神道が廃棄され、「昭和憲法」のもとで宗教の自由と政教分離が保障されると、神社は宗教法人となってふたたび庶民の手に戻ってきた。そして、村でも町でも、神社に対する人々の信仰がよみがえってきた。そうした神社信仰の表現が、お宮参りであり、七五三の参詣であり、新年の初詣であり、神前結婚であり、地鎮祭であり、初午、初天神、初戎などの祭日への参詣であり、さらには夏秋の村祭りである。そうしたカミ信仰の一つとして、江戸時代以来の商人、職人の守護神、屋敷神信仰がある。そこで最後に、現在の企業のなかにこうした守護神の信仰、屋敷神が現在でも活きている例をみることにしよう。

企業の神社については、宇野正人氏が1983年から84年にかけて全国49社を訪ねて企業の歴史と企業の神社を調査され、その結果を『企業の神社』（神社新報社刊）として公表されている。この調査は着想といい調査の規模といい、「前人未踏、空前絶後の偉業」といってよい。筆者も宇野氏の調査に触発されて、1994年の夏に、主に京、阪、神の三都市の企業、神社を調査してみた。以下がそれである。

スペースの制約のために、ここに記載できる業界の数は少ないが、現在の企業のカミ信仰について、大要は理解できると思う。

1. 標準的なケース

まず、もっとも多いのは、会社の敷地のなかに神社を祀って、そこに会社の従業員有志が月に1度、あるいは年に1～2度ずつ月次祭、例祭をおこなうケースである。調査が京、阪、神地区に限定されたためか、今回の調査でみられた企業の神社はほとんど稲荷神社で、祭神は稲荷大明神であった。われわれがよく眼にするデパートの屋上の神社も、これである。

ただし、同じ稲荷神社といっても、祭神の表しかたに4つのケースがあった。1つはただ稲荷大明神としているケース、2つは諏訪稲荷大明神などというように、勧請元の名称をつけているケース、3つめに、会社の名前やその略称をつけて「〇〇稲荷大明神」としているケース、そして4つめに、大阪証券取引所の「福德稲荷大明神」のように、会社とも勧請元とも独立に、立派な名前をもっている神社である。

ところで、これらの祭神がいつ勧請され、神社がいつ建てられたのかについては、質問をしてもほとんど精確な回答が得られなかった。神社の創建が戦前まで遡ると、その当時の記録が残っていないのである。さらに、企業のなかで、こうした事務を担当される総務課長さんが数年で配置転換してしまうために、過去の事情を知らないということもある。

会社で月次祭をするような場合の目的については、製造業の場合にはとくに、従業員の安全祈願であるということが印象的であった。社内の神社の前で従業員の安全を祈願することは、安全確保の周知徹底という点で効果的であると感じられる。また、企業によっては、正月に役員有志で、伊勢神宮、伏見稲荷、住吉大社などに新年祈願に出かけているところがある。これは、広い意味でも営業に関する祈願（売上の増進、利益の向上、従業員の健康など）であろう。毎年正月に新聞テレビで報道されるのが、これである。

2. 三菱グループの土佐稲荷神社

こうした企業のなかでユニークなのが、三菱グループの土佐稲荷神社であろう。

この神社は、大阪西区の北堀江にある。この地は西を木津川に、北を長堀川に画された地区で、江戸時代に土佐藩藩邸と蔵屋敷のあったところである。稲荷神社は、享保年間に藩主の山内豊隆が伏見稲荷から蔵屋敷のなかに勧請して建てたといわれている。土佐の物産（木材、鯉節、樟脳など）の販売促進を願ったことかも知れない。

明治維新後、廃藩置県によって藩邸は明治政府の手に移ったが、幕末に土佐藩の地下（じげ）浪人という低い身分から身を起し、藩の殖産興業に力を尽くして、土佐藩の大阪商会（貿易、特産品の販売機関）の責任者になっていた岩崎彌太郎は、明治5年にこの旧藩邸を買い戻し、ここを三ツ川商会（後の三菱商会）の本拠地とした。その際、彼は神社

も引き継いで、これを三菱の屋敷神とした。

その後、岩崎は明治7年、東京に本拠を移すにあたって、藩邸を大阪市に寄贈したが、神社は岩崎家の所有地としたようで、明治41年の証書には岩崎彌之助の所有地となっている。その後、岩崎の手を離れた後も、実質的に三菱合資によって管理されてきた。

岩崎彌太郎自身がどれほど厚く神社を信仰していたかは、わからない。彼の日記を読んでも、「晚寓楼置酒」（夜、楼に登りて酒を呑む）という記事は多いが、「神社を参拝す」という記事は少ない。ただし、日常茶飯事のことなのでいちいち日記には記さなかった、ということも十分にありうることであろう。『壬申日歴』の明治5年8月8日の項には、「雨、友顔東京に赴かんとす、余また新宮に赴かんとす、●午後雨甚だし、友顔出港を翌日に延べ、山上茂大夫を呼び、稲荷社に於て船の祈祷を行ふ、余もまた祈祷す」³²とある。彼が持ち船「夕顔」の航行の安全を祈って、必死の思いで稲荷神社にすがっている姿がうかがえてほほえましい。

戦後、神社は宗教法人に移行し、その法的性格は変わったが、三菱グループによる神社への支持は変わらなかった。現在でも三菱銀行、商事、重工、倉庫の4社の役員が神社の責任役員になっている、といわれている。大阪には三菱系企業の大阪支社、支店などの役員有志からなる「菱友会」が組織されており、

毎年4月にここで「三菱弥栄（いやさか）祈願会」が開催されている。このほか、三菱系企業の社長会である金曜会のメンバーが、正月には年始に、株主総会の後の7月には新役員としての参拝に訪れるということである。7月に神社に参拝があるというのは、会社ならではのことであろう。

この神社は、昭和20年の戦災で消失した後、小さな社殿のみであったが、平成5年に新社殿が完成して4月に竣工式が催され、金曜会のメンバーら60人が竣工式に出席したことは記憶に新しい。当時は新聞に『「三菱の発祥の地は大阪」を改めてアピールした』（毎日新聞）と報道されたものである。神社の周囲の石玉垣にも三菱金曜会として、銀行、商事、重工、倉庫、電機、化成、東京海上、旭硝子（記載順）などの、三菱グループの会社名がそろって彫られている。

三菱グループの企業は、「組織の三菱」といわれるほど結束力が高いことで知られているが、三菱社員はこの神社を訪れることによって、創業者の意志がここに秘められていることを確認できるであろう。それと同時に、江戸時代の蔵屋敷の屋敷神が現在に受け継がれている神社としても、非常に珍しいケースである。

3. 証券業界の神社

大阪の北浜には証券会社が軒を並べているが、ここにも稲荷神社が林立している。

よく知られているように、証券会社の社員は昔から仕事熱心であり、あわせて信心深かつ

32 岩崎彌太郎・岩崎彌之助伝記編纂会『岩崎彌太郎日記』586ページ。ただし、原文の漢文を読み下し文にした。

た。北浜では、大阪証券取引所が設立（明治11年）されてまもなく、証券会社の関係者が集まって「株栄講（しゅえいこう）」を結成し、神社、仏閣の参詣を始めたらしい。歴史は古いのである。彼らは現在でも、この株栄講を中心にして毎年秋に伏見稲荷大社にレクリエーションをかねて出かけており、北浜でも年に数回、月次祭をおこなっている。

ところが証券会社の有志の信仰は、伏見稲荷大社だけではない。「株栄講」として、毎年春に信貴山の朝護孫子寺（真言宗）の千手院に、これもレクリエーションを兼ねて出かけており、また「北浜戎講」を組織して堀川戎の初戎（1月）に奉仕活動をし、さらに明治43年以来「北浜^④団」を組織して、大阪天満宮の天神祭り（7月25日）に網代車をだして奉仕している。このほか、証券会社の経営者の有志が別に集まって、毎年1月に住吉大社と伊勢神宮に奉賛会を組織して新年祈願に出かけてたりもしている。

このように、証券関係者の神仏信仰は我々の予想をはるかに超えるものがある。その源泉を推測するに、証券業が金銭に直接に係わる業種であるということがあり、さらに、もともと景気や株価の変動が人力では正確に予想しにくかったという事情があったであろう。いくら科学が進歩しても、我々はなお90年代はじめに起こったような株価の暴落と証券業の不況を予見することはできない。神仏に向かって手を合わす証券マン、証券ウーマンの後ろ姿には、自己のベストを尽くして、なお神仏に祈らんとする「謙虚さ」がみられる

といえよう。

4. 大坂道修町、製薬業界の守護神

大阪中央区の道修町には、製薬会社が軒を並べている。ここは江戸時代以来の薬種問屋がいまなお、同じ通りの同じ場所に、昔の店をビルに変えて商売を営んでいる、日本有数の地区である。

製薬会社の敷地内にも稲荷大明神を祀った稲荷神社があり、毎年特定の日に稲荷祭を催して、商売繁盛をお願いをしたり、毎月1～2度の月次祭をおこなったりしている。稲荷神社の歴史は明らかでないことが多いが、前のII節でも触れたように、江戸時代以来の立地企業があることを考えれば、非常に古いことだけは間違いない。

道修町の製薬会社についていっそう注目すべきことは、会社が講を作って少彦名神社を守り、あるいは他の神社に参拝に出かけていることである。こうした講の起源は中国の薬神である「神農」に対する信仰であったが、江戸時代になると伊勢講が結成されて、伊勢神宮への参詣がおこなわれるようになった。ところが伊勢が遠いためか、当時の商人たちは安永9年に京都の五条天神社から祭神の一人、スクナヒコナノミコト（少彦名命）をこの地に勧請して少彦名神社を建築し、これを「神農さん」として祀ってきた。これが現在につづく道修町の有名な少彦名神社である。

中国の神農は、古代中国の農業神であり、民衆の信仰も厚かったといわれているが、その詳細は明らかでない。しかし、とにかく農

業、本草の神であることは間違いない。『万葉集』(巻5)にも、よわい74歳にして病に沈んでいた山上憶良がつくった一文があり、そのなかに、「所以(かれ)、道人方士の、自ら丹経を負ひ、名山に入りて薬を合するは、性を養ひ神を怡(やはら)げて、以ちて長生を求むるなり。抱朴子に曰く、神農云ふ、百病愈えずは安(いか)にぞ長生を得むといふ」³³と記されている。すでにこの頃、日本の知識人が道教の重要文献の一つである『抱朴子』を読んで、神農の言葉を知っていたことがうかがえる。

一方、少彦名命は、『日本書紀』に「かの大己貴命(おおあなむちのみこと、大国主命のこと)、少彦名命と力を戮せ心を一にして、天下を経営(つく)りたまふ。また顕見蒼生(うつしきあをひとくさ)及び畜産(けもの)の為に、則ち其の病ひを療(おさ)むるの方を定む。又鳥獸昆虫の灾異(わざはひ)を攘(はら)はむ為には、則ち其の禁厭(まじなひやむる)の法を定む。是を以て百姓(おほみたから)今に至るまで威(みな)恩頼(みたまのふゆ)を蒙れり」³⁴とあって医療、薬草の神であったことがわかる。

こうした江戸時代の人々の神農講は、現在でも「薬祖講」という名称で受け継がれており、毎年11月22～23日の2日間は「神農さん」というお祭が催され、広く大阪じゅうからお参りにくる人のために狭い通りは溢れか

える。

製薬会社では、このほかにも幾つかの講を組織している。たとえば「お湯講」は、最初は田辺家の親族の講から出発したといわれているが、現在では田辺製薬以外の製薬会社も参加して、毎年1月に20社ほどの有志が大阪天満宮に参詣している。また、「八幡講(祈禱講)」は、毎年1月には京都の石清水八幡宮に、「薬神講」は毎年4月に奈良の大神(おおみわ)神社に、それぞれ代表を送って、製薬の安全と繁栄を祈願している。これらが、どれほどの歴史をもつかわからないが、なにしろ田辺家はすでに享保年間には道修町で開業していたという家柄であるから、その伝統の長さが偲ばれよう³⁵。

ともあれ、一つの業界がそれ自身の神社を作って300年も守り通してきたというのは、全国にも類がないであろう。

5. 酒造業界の守護神

酒どころ、神戸の灘や京都の伏見の酒造会社では、稲荷神社と松尾大神を祀っている。

このうち、稲荷神社は会社敷地内に祀られている場合が多い。それらの会社では、定期的に稲荷祭りを催して、会社の営業成績の向上や従業員の安全、健康を祈願している。

これに対して、会社の醸造蔵の神棚には、松尾大神が祀られている。酒造会社では、毎年酒の醸造の始まる秋に、一部の役員が京都の松尾大社や梅宮大社にお参りして、醸造の

33 佐々木信綱編『新訂新訓万葉集』(上巻) 234 ページ。

34 大倉精神文化研究所『神典』, 213 ページ。

35 道修町と薬種問屋の講については、宮本又次『船場』176～218ページを参照。

安全を祈願するとともに、会社の各蔵でも醸造の安全を祈願する「酛始御祓」をおこなっている。また、醸造の終了する春には感謝の意をこめて「醸造奉告祭」をおこなっている。このように酒造会社では、商売繁盛の祈願を中心とする稲荷大神と酒造工程の安全を祈願する松尾大神とを、あわせて祀っていることが面白い。前者はおそらく主人（社長）の屋敷神の名残であり、後者は杜氏の守護神であったと推測される。

ところで、松尾大社はなぜ酒造の神様と崇められているのだろうか。もともと松尾大社の祭神の一人であるオオヤマグイノカミ（大山咋神）はスサノオノミコト（須佐之男命）の孫であって、『古事記』に「大山咋神、またの名は山末之大主神、此の神は近淡海国の日枝山に坐す。また葛野（かづぬ）の松尾に坐す。鳴鏑（なりかぶら）に成りませる神なり」³⁶と記されているように、近江の比叡山と洛西の松尾山との両所を治める神といわれていた。

ところが、後にも述べるように、4～5世紀頃に大陸から渡来した秦氏の一族がこの地に定住し、一族の一人である秦忌寸都理（はたのいみきとり）が、大宝元年にこの地に神殿を建立して、大山咋神を勧講することになった。しかるに秦氏は、秦の始皇帝の子孫といわれたくらいの上層階級だったから、大陸伝来の先進技術を活用して、この地の清水をつかって極上の清酒を造ることができたらしい。

そこで世間では、秦氏の祀る大山咋神は酒造の神様である、と言われるようになったのではないかと推測できる。じっさい松尾大社は酒造に限らず、醸造（醤油、味噌、酢、ビールなど）の神様を祀る神社としても知られており、全国の醸造メーカーの信仰が厚いのである。

6. 稲荷信仰について

さて、企業の神社について、忘れてならないのは稲荷神社であろう。稲荷神社はすでに江戸時代においてもっとも多い屋敷神であったが、現在でも全国で最多の神社であり、企業や個人の屋敷神としてももっとも多い。それでは、稲荷神社とはそもそもどういう神社なのであろうか。なぜ商工業者の信仰が厚いのであろうか。最後にこの神社について、簡単に述べたい。

実は、稲荷神社には伏見稲荷以外に、愛知県豊川市の豊川稲荷や、岡山市の最上（さいじょう）稲荷などがある。しかし、ここでは全国の稲荷信仰に深い影響を及ぼしていると思われる、伏見稲荷大社に絞って述べたい³⁷。

伏見稲荷大社の主祭神はウカノミタマ（古事記では宇迦之御魂神、日本書紀では倉稲魂神）であり、この神は古来、その名からして稲作の神とみなされてきた。しかし、よく考えてみると、稲荷神社がウカノミタマを迎え

36 前掲、『神典』43ページ。

37 以下の文章は、肥後和男「稲荷信仰のはじめ」（『朱』創刊号）、「稲荷信仰の特質」（同、第4号）、「ウカノミタマ再考」（同、第10号）、赤松俊秀「稲荷祭と東寺」（同、第3号）に依っている。

る以前から、稲荷山周辺は農業神のとどまる場所であったといえよう。なぜなら、イナリとはイネナリの短縮した名称といわれるように、もともとこの地域には弥生時代以降、農民の手で豊かな水田耕作がおこなわれていて、土地の農業神に対する素朴な農民の信仰があったことが推測されるからである。柳田国男のいう「氏神」である。しかし、この氏神が発展して現在の稲荷大社になったわけではない。その間に二つのクッションがあったのである。

第1は、おそらく4～5世紀に、大陸から秦氏が渡来して、山城国の地に定住したことである。これが、先に松尾神社の項で述べた秦氏と同じ一族の秦氏である。この秦氏は、『新撰姓氏録』のなかに「秦忌寸（はたのいみき）、太秦公宿禰（うずまさのきみのすくね）と同じき祖、秦の始皇帝の後（すえ）なり」³⁸、と書かれたほどの一族であるから、大陸から養蚕、絹紡織、醸造、土木工事などの先進技術と、それを体得した技術者たちを連れてきたと推測される。その秦氏がこの伏見の地で稲荷神社を信仰するようになったのである。

『山城国風土記逸文』には、秦中家忌寸（はたのなかつへのいみき）らの遠い祖先である、秦公伊呂具（はたのきみいろぐ）が稲作で富裕になった後、あるとき餅を的にして弓を射ったところ、餅は白鳥となって翔んで山の峰にとまって、イネナリが生えたので、

これを神社の名称とした。その子孫はこれをこのことを悔いて、神社の木を引き抜いて自宅に植えて祈った、とあり秦氏が稲荷神社に関係が深いことがうかがえる記述がある。³⁹

その結果、どういうことが起こったかというと、稲荷神の御利益が農業から産業一般に拡大したのである。あの先進技術で有名な秦氏が祀っている稲荷神社なのだから、きっと工業でも漁業でも御利益があるに違いない、ということになったからである。

第2に、東寺と稲荷神社との関係を伝える伝説が作られたことである。伝説によれば、空海が東寺の門前で稲を荷なって休息していた老夫婦を発見し、稲荷神社の境内に鎮座して、東寺の鎮守になってくれるよう依頼したことがきっかけだったという。この伝説の史実性は怪しいが、それ以来、稲荷神社と東寺とのあいだに密接な関係が成立し、稲荷神社は教王護国寺（東寺の正式名称）をバックにして影響力を高め、東寺も稲荷神社のおかげで発展したことが推測できる。

こうした社会経済史的な現実が進行している間に、農業神、漁業神、工業神としての稲荷大明神の御利益が確立していったと想像される。そして、中世から近世にかけて、近畿一円から全国へと稲荷神社の勧請と普及がおこなわれていった。柳田国男のいう「氏神から勧請神への移行」である。江戸時代になると、江戸では「伊勢屋稲荷に犬の糞」といわれたくらい、稲荷神社が増加した。大きな社

38 前掲『神典』1798ページ。なお『新撰姓氏録』については、佐伯有清『新撰姓氏録の研究』（考證篇第5）の、とくに279ページ以下を参照。

39 前掲『神典』2036ページ。吉野裕訳『風土記』（東洋文庫）273-274ページ。

殿をもつ稲荷神社だけでなく、商家、武家の屋敷内、さらにはどの町内にも稲荷があったというほどの増えかたであった。

稲荷神社の全国的な普及をもたらした原因として、2つが挙げられると思う。

第1は、稲荷大明神が産業の神様だったことである。もともとのイナリ（農業神）に加えて、秦氏のもたらした養蚕、絹織物、土木、醸造などの先進技術が、漁業、工業の支援者としての稲荷大明神、というイメージを漁民、職人のあいだに植え付けたと考えられる。II節にみた小鍛冶伝説がその一例である。

第2は、肥後和男氏が指摘された、稲荷神社の庶民性である。稲荷神社は、伊勢神宮（天皇家）、春日大社（藤原家）、八幡神宮（源氏一門）などと違って、有力な氏子がなかった神社であったから、貴族社会のなかでは一段低く見られがちであった。しかし、反対に一般庶民の側からみれば、稲荷大明神は生活上の悩みを気軽に打ち明け、願いをかなえてもらえる身近な神様だったといえよう。誰がいつ建てたかわからない、神社とはいえそうもない「稲荷のほこら」が、それこそ全国至るところにあるという事実が、なによりもこのことを証明している。その意味で稲荷大明神は、仏教における地蔵菩薩と双璧であろう。その末裔がこの節でみた、現在の企業の神社としての稲荷神社である。

こうして、現在の企業社会のなかに、いまでもカミ信仰が生きることが明らかになったと思う。ことは、企業に限らない。われわれは家々に神棚を設け、日々の生活のなかで

も初詣で、受験前の神社参拝、神前結婚、地鎮祭、夏秋の祭りなどに、積極的にカミに詣で、祈願をしているのである。カミ信仰は立派に生きている、といえよう。

IV 要約と評価

以上われわれは、日本人のカミ信仰を検討してきた。最後にここまでにわれわれが到達した暫定的な結論を要約し、将来への指針を与えて結びとしよう。

どの国でもそうだが、日本人のカミ信仰の歴史も古く、きっと日本人が形成された時点にまで遡るであろう。日本人のカミ信仰について、もっとも注目すべきことは、近代化をとげ、世界の最先進国となった現在でもなお、日本人は彼らに固有の民族神であるカミを祀り、祈願し、感謝をする信仰を固く守っている、ということである。素朴な民族宗教である神道が、儒教、仏教、キリスト教のような世界宗教の浸透した後もなお、根強く生き残って、活発に人々の生活を潤している。ここに日本人の宗教の最大の特質を発見することができる。

日本企業がオフィスビルや工場敷地のなかに神社を祀って、毎月のように月次祭をおこない、あるいは新年、春、秋の季節になると、レクリエーションを兼ねてとはいえ、社員が神社にお参りに出かけるというのは、欧米諸国の企業経営の常識からみると仰天するほどの奇妙な行動に見えるかも知れない。しかし日本人にとっては、これは江戸時代の農家、商家、職人、武家以来の永いしきたりなので

あり、たんにそれを現在に継承しているに過ぎないのである。それを異質であるとか、封建的であるとかといって非難するのは、おかしな違いもはなはだしいものである。

すでに本稿で述べてきたように、日本人のカミ信仰には経済的にみて積極的な意義がある。

第1に、日本の自然を愛するものは、大地の至るところにカミ（山の神、川の神、風の神、森の神、田の神、石の神等々）がとどまる、というカミ信仰を思い起こすことによって、自然を敬い、大事にし、ひいては自然環境を保全しようとするであろう。カミは家のなかにも宿っている、と考えるのが日本人である。竈にも便所にもカミはいると信じられており、座敷にワラシが潜んでいると伝える地域もある。「お米にはカミ様が宿っていなさるだから、一粒でもこぼしてはなんねえ」といわれた読者も多いだろう。こうした言い伝えが、「物を大切にする」という価値観を日本人に植え付けてきたことは疑いない。

第2に、職人が守護神をもったということは、職人に「カミかけて、よい仕事をしなければならぬ」という緊張感をもたらした。日本人は、労働は賃金を得るための肉体的な犠牲である、というような消極的な労働観ではなく、カミ様にも看てもらえるような立派な仕事をしなければならぬ、という積極的な労働観を育ててきた。現在の製造現場にこの労働観が生きてつづけていることは、日本製品の品質が世界に誇る優秀性を維持していることに証明されている。あるいはホワイト

カラーの、仕事に対する強烈な責任感としても表わされている。仕事が一段落しないいうちは定時になっても帰宅しない、というのはその一例である。

第3に、カミが存在するという考えは、ともすれば人間が何でもできるという奢りを振り払うのに必要である。我々は核兵器を作り、体外授精も可能な技術を実現した。しかし、反面、先進国のどこでも、人々はストレスに苦しみ、社会には犯罪や離婚が増加している。経済の側面でも、好況の後には不況があり、投機に失敗はつきものである。どれほどコンピュータ技術が発達しても、企業の破産は繰り返され、不良債権に苦しむ債権者は存在するのである。

「モノは豊かになったが、心が貧しくなった」といわれる時代に、その「心」は、なんといっても宗教以外では豊かにできない。キリスト教の普及度の少ない現在の日本では、心の豊かさを取り戻そうとすれば、大半の人々は、「新宗教」とよばれる新しい宗教をふくめて、なお神道や仏教にすがらなければならないのである。

第4に、日本人のカミ信仰は、長い歴史のなかで儒教、仏教、キリスト教を受容し、これと融合し、むしろこれをゆるやかに包摂してきた、という輝かしい歴史をもっている。たしかに戦前の一時期、日本人のカミ信仰は「カミがかりの神国思想」になり、近隣諸国を侵略するという過ちを犯した。しかし、この恥ずべき一時期を除けば、日本の宗教史は、神仏習合を代表として、宗教間の共存と融合

の歴史である。米ソの冷戦の終了後、世界各地に民族対立が発生し、しかも今後ますます激化することが予想されることを思えば、われわれはもっと日本人の編み出した「異宗教間の融合」という知恵を研究する必要がある。

しかし、こうした重要な意義を有するにもかかわらず、他方では、日本人のカミ信仰が衰退する兆しが現れている。

すでに指摘したように、現在のわれわれのカミ信仰は、新年の初詣で、受験前の天神参詣、祭りへの参加のように祈願と観光とレクリエーションを中心としたものによって変わってきている。一見すると華やかにみえる祭りについても、祭りに出かける人々の気持ちはいわゆる「祭り気分」であって、かつて自分たちの祖先が氏神を敬い、豊作を祈り感謝しながら日々の生活を送っていた真摯な姿が喪われている。あるいは、創業以来の伝統を誇る企業の神社についても、経営者の親族ではない一般社員には、かつてこの会社に稲荷を勧請し、仕事の安全と商売の繁盛を祈念した創業者の精神は受け継がれにくくなっている。さらに、われわれは戦後の高度成長と引き換えに、自然に宿るカミの存在を忘れて自然破壊をつづけてきた。このように、近年のわれわれは、日本人のカミ信仰の原点であった「敬神」の精神を失って、あまりにも即物的な「祈願」と「観光」に偏りすぎた態度をとってきたのではないだろうか。

一方、また神職の側でも、ただ神社に座して信者の参拝や賽銭を待つだけでなく、日本

の自然である田園と森と緑を護り、日本人の心の病を治すための積極的な行動を起こすべきではないだろうか。そのために、神社がみずから門戸を国民に開放して、神道の教義をやさしく説明し、国民と一緒に「世界における日本の将来」を考える必要があるのではないだろうか。

ひとは神社を議論する時に、ともすれば神社の由緒、格式に捉われる。その結果、歴史書や由緒記の一字一句にこだわった形式的な議論を展開しがちになる。しかし、実際にカミを信仰しようとする国民の大多数は、いつの時代においても一般庶民、生活者なのであり、その関心は日々の仕事と生活にほかならない。農民であり、漁民であり、商人であり、職人であり、中小企業者であり、工場労働者であり、消費者であるような一人一人の庶民が、心から敬神の気持ちを抱けるカミ、生活の悩みを率直に打ち明け、ささやかな願いを託せるカミ、そのようなカミが「偉大なカミ」であろう。日本人の信仰を考える時には、われわれはこの原点をしっかりと見つけなければならぬ。このことは、なにもカミ信仰に限らず、キリスト教でも、仏教でも同じではないかと思う。

引用文献

- 赤松俊秀「稲荷祭りと東寺」,『朱』第3号, 1967年。
- 岩崎彌太郎・岩崎彌之助伝記編纂会『岩崎彌太郎日記』, 1975年。
- 宇野正人『企業の神社』神社新報社, 1986年。
- 遠藤元男『日本職人史の研究Ⅰ 日本職人史序説』雄山閣, 1985年。
- 遠藤元男『日本職人史の研究Ⅲ 近世職人の世界』雄山閣, 1985年。
- 大倉精神文化研究所『神典』大倉精神文化研究所, 1936年。
- 大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済史料集成』(第5巻, 第6巻), 大阪商工会議所, 1974年。
- 斎藤月岑・朝倉治彦校注『東都歳時記』(1, 2, 3), 平凡社東洋文庫159, 177, 221, 1970年, 1970年, 1972年。
- 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』(考證篇第5), 吉川弘文館, 1984年。
- 武田祐吉訳注, 中村啓信補訂・解説『新訂古事記』角川文庫, 1977年。
- 谷川健一編集委員代表『日本庶民生活史料集成』(第23巻), 三一書房, 1981年。
- 千種義人『福沢諭吉の社会思想』同文館, 1993年。
- 直江広治『屋敷神の研究』吉川弘文館, 1966年。
- 中村幸彦校注『近世町人思想』岩波書店, 日本思想大系59, 1975年。
- 肥後和男「稲荷信仰のはじめ」,『朱』創刊号, 1967年。
- 同 「稲荷信仰の特質」,『朱』第4号, 1968年。
- 同 「ウカノミタマ再考」,『朱』第10号, 1970年。
- 福沢諭吉『福翁自伝』岩波文庫, 1978年。福沢諭吉選集第12巻, 1981年。
- 宮本又次『宮本又次著作集1』講談社, 1977年。
- 同 『船場』ミネルヴァ書房, 1960年。
- 柳田国男「氏神と氏子」,『柳田国男全集14』筑摩文庫, 1990年。
- 山川菊栄『武家の女性』岩波文庫, 1983年。
- 吉田豊編訳『商家の家訓』徳間書店, 1973年。
- 吉野裕訳『風土記』平凡社東洋文庫, 1969年。

On the Economic Effects of Shintoism

Tadahiro UEMATSU*

This paper aims to clarify the economic effect of the Japanese faith in Shintoism.

In spite that Shintoism is a primitive religion with an animistic color, Japanese people have been keeping their belief in Shintoism together with Confucianism, Buddhism and Christianity even after these world-wide religions were introduced into Japan.

An interesting question is whether there is any relationship between the belief in Shintoism and Japanese economic development, and if any, what it is.

Paper introduced the analysis of Kunio Yanagida on the change of people's belief in Shintoism from the veneration of ancestors to the Kami with good fortune or specific power of industry, and also from the genuine worship of Kami (ancestor) to the prayer with request.

In the section 2, author tries to identify the Kami of merchants and artisans of the Edo period and to show the reason why those Kami came to be worshipped by merchants and artisans. Examples are Sukunahiko No Mikoto worshipped by pharmaceutical merchants, Shotoku Taishi by carpenters, Kakinomoto No Hitomaro by paper-making artisans in Iwami area, Inari by metal artisans, and the Sumiyoshi Shrine by Osaka merchants, etc. Merchants and artisans worshipped those kami not only in their shops or works, but also went to the shrines of those guardian Kami.

It is also pointed out that Bushi (warriors) had their own family shrines in their own residence whose kami were mostly Inari.

In the section 3, author shows the result of his own interview to the company managers and the Shinto priests in Kansai district. It is revealed that Japanese companies not only have their own shrines on the rooftop of the main building or in the factories keeping monthly and/or annual festival, but also still continue to go to the same shrines of guardian Kami as that of their seniors more than one hundred years ago.

They talked to the author that it is valuable for employees to confirm Safety

*Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

First together in front of the company shrine monthly, for company managers to promise to do their best in front of guardian Kami every specific day of January, and for employees of the different companies of the same industry have a recreation tour together to the shrine of guardian Kami on a good day in spring or in autumn.

Thus a tentative conclusion that author deduces from this paper is that Japanese people's belief in Shintoism has certainly had a positive effect on their economic development in their work, management and mutual cooperation. It is completely different from the Western combination of religion and economy. It is, however, surely a Japanese way.